

# 補文標識 *that* を伴う埋め込み疑問文の使用実態： オーストラリアで実施したインフォーマント調査の結果\*

谷 川 晋 一

## 1. はじめに

本稿は、(1a, b) に例示する非標準的な英語の埋め込み疑問文を考察対象とする。

- (1) a. I'd just like to find out that how do people on the continent remember  
Paul Scholes? (Radford (2018: 113))  
b. I'm trying to understand that why we don't see any French planes as  
part of the strike force. (Radford (2018: 117))

これらの例のように、埋め込み疑問文が補文標識 *that* に後続した形式を Embedded Questions with *That* (*That* を伴う埋め込み疑問文) と呼んだ上で、略語として、頭文字を取った EQT を用いる。

Radford (2013, 2018) は、EQT が一部の英語母語話者には認められる口語的な文形式であると述べている。実際、拙稿である谷川 (2024) の冒頭でも述べている通り、筆者が英語母語話者に尋ねた限りにおいても、EQT を耳にしたこ

---

\* 本研究は、JSPS 科学研究費補助金基盤研究(C)「*that* が現れる特異な補文現象の領域横断的研究：社会言語学と理論言語学からの接近」(課題番号 21K00571) の助成を受けた研究成果の一部である。オーストラリアでのインフォーマント調査を行う上で、惜しめない協力をしてくださったオーストラリア国立大学の小島卓也先生に心より感謝申し上げたい。加えて、草稿に目を通した上で、体裁及び内容に関するコメントをくださった西南学院大学大学院の若芝青氏にも感謝申し上げたい。本稿における誤りや不備は、当然ながら、すべて筆者の責に帰する。

とがあるという話者が2人ほどいたが、稀有な形式であり、粗野に聞こえ、非教養的だという印象を感じやすいという回答であった。英語のEQTは、標準的な文法規則に沿わない、いわゆる、破格の形式であり、あくまでも、このような疑問文を認める話者もいるという位置づけが相応しい形式であると言っても過言ではない。<sup>1</sup>

本稿の目的は、筆者が2024年9月にオーストラリアで実施したEQTの使用実態に関するインフォーマント調査の結果について、簡潔な分析と考察を行うことである。本稿は、今後も引き続き実施していく連続的調査の一環であり、今後の継続的な調査研究を見据えて、現時点で得られているデータのまとめを行うという趣旨のもと、執筆しているものである。

本稿の構成は、以下の通りである。2節では、EQTの先行研究であるRadford (2013, 2018) と谷川 (2024) を概説し、その問題点を指摘する。3節では、筆者がオーストラリアで実施したEQTの使用実態に関するインフォーマント調査の結果を提示し、簡潔な分析と考察を行う。4節では、まとめを行う。

## 2. EQT の先行研究

英語のEQTを考察対象にしている代表的な先行研究として、Radford (2013, 2018) が挙げられる。BBC等のイギリスのテレビ・ラジオ放送(台本・原稿なしの番組)で使用されている実例を提示しながら、EQTの考察を行っている。EQTを、(1a)のように、*that* 節内で主語・助動詞倒置が適用されるタイプと、(1b)のように、当該倒置が適用されないタイプの2種類に分けた上で、EQTが一部の英語母語話者には認められる口語的な文形式であると述べている。<sup>2</sup>しかし、英語のEQTに関するデータは少なく、深い考察を行った文献は、Radford (2013, 2018) 以外、表立ったものがない。

<sup>1</sup> スペイン語研究者である土屋亮氏(個人談話)によれば、スペイン語のEQTにも、破格で非教養的だという印象が伴うということである。

<sup>2</sup> アイルランド英語、ニューファンドランド英語、アメリカ英語の方言等では、“I wonder where were they going.”のように、主語・助動詞倒置が適用された疑問文が*that*を伴わない形で埋め込まれる例が見られる。これらの埋め込み疑問文は、補文標識*that*を伴っていない点で、(1a, b)のEQTとは異なるため、本稿の考察対象からは除外する。

このような経緯を踏まえた上で、拙稿である谷川（2024）は、英語の EQT の実例に関して、補強的なデータを提示した。English-Corpora.org(<https://www.english-corpora.org/>) に収録されている iWeb, Global Web-Based English (GloWbE), News on the Web (NOW) という、ウェブデータを中心にした 3 つのコーパスを用いて、実際に、どの程度、ウェブ上で EQT が使用されているかに関する調査を行った。主動詞として *wonder*, *ask* の 2 つが使用された場合に的を絞り、これらの動詞の各種活用形に「補文標識 *that* + 疑問詞疑問節」が後続しているケースを検索対象とした調査を行った。結果、GloWbE と NOW での出現数は非常に少なかったが、イギリスのみならず、アメリカ、カナダ、ニュージーランド等のインナーサークルの英語でも EQT の使用例が見られることが確認された。(2) に示す EQT の例は、当該コーパス調査で得られたものの一部である。

- (2) a. People who have seen the S&L crisis of 1980s might just wonder that what is the big deal?
- b. So I asked that why did it change?
- c. People wonder that how much time they were investing in this work earlier which takes some seconds now and look so professional and attractive.

(谷川（2024: 268-269）)

この調査を通して、Radford（2013, 2018）の考察にあった、i) *that* 節内で主語・助動詞倒置が適用されているものと適用されていないもので、2 種類の EQT が存在する、ii) 通例、*that* 節を選択できない *wonder*, *ask* を用いた EQT が存在する、という 2 つの特性が確認された。

しかし、谷川（2024）の問題として、当該データを英語母語話者が用いた確証を得ることが難しかった点が挙げられる。ドメイン指定や使用地域に関して、可能な限り、インナーサークルに限定する設定を行っているものの、非英語母語話者が使用している可能性を排除できなかった点が懸念された。インフォー

マント調査等を行うことで、更にデータを補強しながら、細かい判断の確認を行う必要があることが示唆された。

### 3. EQT の使用実態に関するインフォーマント調査

2節で示した通り、谷川（2024）のコーパス調査によって、ウェブで使用されている EQT の実例を一定程度、得ることができたが、インフォーマント調査を行うことでデータを補強する必要性が示唆された。本節では、当該の示唆に基づいて、筆者がオーストラリアで実施した EQT の使用実態に関するインフォーマント調査の結果を提示した上で、簡潔な分析と考察を行う。

筆者によるインフォーマント調査は、2024 年 9 月にオーストラリアのキャンベラとシドニーで行われた。被調査者は、主として、キャンベラにあるオーストラリア国立大学に在籍する 20 歳前後の学部生で、被調査者の合計人数は 16 名であった。このうち 14 名は、調査者（筆者）が同席している場において対面形式で、残りの 2 名は、Webex を使用したオンライン・ミーティング形式で調査に参加してもらった。16 名すべてがオーストラリアで生まれ育った者だったが、そのうち半数は、両親の両方、もしくは、いずれかが日本、韓国、香港、トルコといった非英語圏からの移住者で、いわゆる、移民の 2 世に該当したが、被調査者本人たちは、英語のモノリンガル、もしくは、英語と親の母語のバイリンガルであった。

調査の進め方であるが、被調査者には、EQT の例文 8 つが印刷された用紙を提示した。具体的には、(3a-d) と (4a-d) に示す例文を提示したが、*that* 節内で主語・助動詞倒置が適用されているものと適用されていないもので、4 文ずつとし、主動詞としては、疑問詞は選択できるものの、補文標識 *that* を選択できない *wonder*, *ask*、疑問詞と *that* の両方を選択できる *understand*, *know* の 2 種類を使用した。

#### (3) *that* 節内で主語・助動詞倒置が適用されている EQT

- a. I wonder that what will we get at the final stage.
- b. We asked that who would Mary invite to the party.

- c. John understands that why did they give the plan up.
- d. You want to know that is there any reason for the pay reduction.

(4) *that* 節内で主語・助動詞倒置が適用されていない EQT

- a. I wonder that what we will get at the final stage.
- b. We asked that who Mary would invite to the party.
- c. John understands that why they gave the plan up.
- d. You want to know that whether there is any reason for the pay reduction.

8つの例文それぞれには、意図する解釈として、“I wonder what we will get at the final stage.” “You want to know whether there is any reason for the pay reduction.” のように、標準的な英語文法を用いた文を付けた。被調査者には、i) このような埋め込み疑問文を会話において自分自身で使用したことがあるか（自身使用）、ii) このような埋め込み疑問文を会話において他者が使用しているのを耳にしたことがあるか（他者使用）、という使用傾向に関する2つの質問に Yes/No での回答を求めた。加えて、Yes の回答が得られた場合には、「誰による発話だったか」「当該疑問文に何か特別な意味が伴うと考えられるか」といった補足質問への回答を求めた。<sup>3</sup>

以下、調査の結果を述べた上で、簡潔な分析と考察を行う。まず、使用傾向に関する回答結果は、表1に示す通りで、表内の数字は、「使用したことがある」「聞いたことがある」にあたる Yes を回答した16名中の人数を表している。

---

<sup>3</sup> 今回は、オンライン・フォーム等を使用する形式ではなく、対面を前提にした調査を行ったため、被調査者数と収集できたデータ数は決して多くはなかった。対面を前提にした調査方法を採用した理由は、ここで述べる通り、使用するか否か等の単純な使用傾向だけでなく、誰がどのような場面で使用したものであったかといった細かい補足質問を被調査者にインタビュー形式で行いたかったためである。

|      | (3a) | (3b) | (3c) | (3d) | (4a) | (4b) | (4c) | (4d) |
|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| 自身使用 | 1    | 1    | 2    | 4    | 2    | 1    | 1    | 6    |
| 他者使用 | 4    | 4    | 6    | 7    | 5    | 3    | 5    | 7    |

表 1：EQT を使用したことがある、耳にしたことがあると回答した被調査者の数

この結果に関して、最も顕著な傾向を述べると、自身使用と他者使用の両方で、埋め込み疑問文が Yes/No 疑問文に該当する (3d), (4d) で Yes の回答が多いという点である。特に、自身使用に関しては、この 2 つの文でのみ顕著に Yes の回答が多い。この傾向に関しては、調査者が補足質問を行った限り、当該文の主動詞として補文標識 *that* を選択できる *know* が使用されている点、当該文のみが Yes/No 疑問文である点が関係しているようである。(3d), (4d) の発話では、本来的には、*know* の直後に疑問詞 *whether* を置きたかったが、誤って、疑問でない埋め込み節で使用する補文標識 *that* を発してしまい、文を最初から言い直すのが面倒で、*that* の後ろで主節 Yes/No 疑問文で使用する倒置の文法を使用した、もしくは、疑問詞 *whether* で始まる疑問文をそのまま *that* の後ろに埋め込んでしまったという回答が多かった。標準英語でも、“*know that*” というコロケーション自体は、許されるため、口語発話では言い直すのが面倒だという理由から、例外的な文法構造だとわかってはいても、そのまま押し切ってしまう、もしくは、そのような理由で他者が押し切るのを聞いたことがあるということであった。(3c), (4c) でも同種の動詞である *understand* が使用されているため、その場合になぜ同種の押し切りが行われなかったかには疑問が残るが、Yes/No 疑問文に相当する (3d), (4d) でのみ、押し切りの傾向が強いという結果であった。(3d), (4d) でのみ Yes と回答した被調査者は、これら以外の文の自身使用では、*that* まで発して、誤りに気づいた後に、主節の主語から改めて言い直すということであった。

次に、補足質問への回答結果について述べる。他者使用では、一番少ない (4b) でも 3 名が Yes の回答であったが、どのような人物たちが行った発話であったか補足質問で尋ねた。結果、英語母語話者による発話であったという回答と非英語母語話者による発話であったという回答で、半々程度に分かれた。

英語母語話者による発話であったと回答した者には、どのような英語母語話者であったか追加で尋ねたところ、大筋で、(5a-c) の3タイプに分けられる回答が得られた。

- (5) a. しっかりとした大人の英語母語話者による発話
- b. 酔っ払っている等、頭が正常でない状態の大人の英語母語話者による発話
- c. 文法知識が未発達の子どもの英語母語話者による発話

(5b, c) の回答は、実質的に、通常環境の英語母語話者が使用するものではないという見解となるが、(5a) に示すように、しっかりとした大人の英語母語話者による発話だったという回答が複数あった。ただし、この回答者たちも、「話しことばとしては許容されるが、書きことばとしては許容されない」という見解であり、冒頭で述べた通り、当該文は、あくまでも、口語的に許される破格の形式であるという特徴が垣間見えた。非英語母語話者による発話であったという回答については、移民1世である自身の父親による発話、アルバイト先の移住者による発話ということだったが、後者については、特に、ヒンディー系の英語話者がこの種の疑問文を使用しやすい印象があるということであった。<sup>4</sup>

最後に、自身使用と他者使用で Yes と回答した者に行った「当該疑問文に何か特別な意味が伴うと考えられるか」という補足質問については、疑問文部分に関して対比等の強調が伴う印象があるという回答が3名から得られた。つまり、(4a) と (4d) を例に取ると、(6a, b) の分裂文に示すように、「知りたいのは、彼ら (they) ではなく、私たち (we) に何が得られるのか」、「知りたいのは、賃上げ (pay raise) ではなく、賃下げ (pay reduction) に何らかの理由があるのか」といった対比強調の意味が伴うという回答であった。

---

<sup>4</sup> この回答は、谷川 (2024: 269, fn.5) が指摘する内容と一致する。谷川 (2024) が行ったコーパス調査の過程において、本筋の集計結果からは除外されたが、GloWbE と NOW では、インドやパキスタンといったアウターサークルにおいて EQT の使用傾向が高いことが確認された。もしかすると、これらの地域で母語として使用されている言語の埋め込み疑問文に関する文法が英語に干渉しているのかもしれない。

- (6) a. It is what we will get at the final stage that I wonder.  
 b. It is whether there is any reason for the pay reduction that you want to know.

このような意味が得られる可能性に関しては、管見の限り、これまでまったく指摘がなされてこなかった。補文標識 *that* は、英語において分裂文でも使用される要素であるため、EQT に対比強調の意味が伴うとすれば、決して、それは、文法的に見て、完全に的外れだと言い切れることではない。EQT の使用を認める話者一般で、この対比強調の意味が想定できるかについては、今後、検証を進めていく価値があると考えられる。

#### 4. おわりに

以上、本稿では、EQT の使用実態に関して、筆者がオーストラリアで実施したインフォーマント調査の結果に基づいて、議論を行った。冒頭で述べた通り、本稿は、今後も引き続き実施していく連続的調査の一環である。今回の調査結果をもって、EQT の本質に関する新しい特徴を見つけ出したとは言い難い。当然ながら、今後、他の地域や幅広い年齢層での調査を行うことが重要である。

#### 参考文献

- Radford, Andrew (2013) "The Complementiser System in Spoken English: Evidence from Broadband Media," *Information Structure and Agreement*, ed. by Victoria Camacho-Taboada, Ángel L. Jiménez-Fernández, Javier Martín-González, and Mariano Reyes-Tejedor, 11-54, John Benjamins, Amsterdam.
- Radford, Andrew (2018) *Colloquial English: Structure and Variation*, Cambridge University Press, Cambridge.
- 谷川晋一 (2024) 「補文標識 *that* を伴う埋め込み疑問文に関する一考察」武内梓朗・竹安大・吉村理一・萱嶋崇・谷川晋一・田中公介・古賀恵介 (編) 『福岡言語学会 50 周年記念論文集』, 265-275, 開拓社.